

男鹿市小谷地遺跡の墨書土器

三嶋隆儀*・庄内昭男*

I はじめに

小谷地遺跡は、耕地整理中に木材と須恵器が見つかったことが契機となって、埋没家屋のあることが確認された遺跡である。昭和39年から昭和41年までの3次にわたる発掘調査と、昭和56年の第4次発掘調査で、平安時代・古墳時代の埋没家屋が検出された。

昨年、この小谷地遺跡の出土品が、男鹿市教育委員会より当館に寄託されることになって、考古部門では収蔵のための整理を行ってきた。整理を進めて行く過程で、改めて貴重なデータを包含している遺跡であることが痛感された。考古部門では、今後時間をかけて、さまざまな遺物について検討を重ねて行きたいと考えている。

本稿ではとくに多量に出土している墨書土器について検討を加えてみたい。最近の調査成果に照して、墨書のある土器自体の分類とその年代観、県内の墨書土器との対比といった点から考察してみた。なお出土品中墨痕が残っているものは160点余りであるが、ここでは判読可能なものを図示し、検討の対象とした。

II 遺跡の位置と調査の概要

小谷地遺跡は、男鹿市脇本富永字小谷地8～9番地に所在する。JR男鹿線脇本駅より県道能代男鹿線を北へ800mほど進んで、若美町払戸へ通ずる農道との交差点に位置する。遺跡は、盛土造成される前の水田面が標高12.8mで、東側の八郎湖岸に向かってゆるやかな傾斜をもった沖積地に立地する。遺跡の西側は、南北に低い段丘がのび、その西北に寒風山(標高354.7m)がある。

第1次～第4次まで行われた発掘調査の概要は次の通りである。

第1次調査

〈期間〉 昭和39年9月

〈主な検出遺構〉 梁行約2.5m・桁行4mほどの竪穴式家屋を想定させる遺構。この家屋遺構より北北東約30mの地点で、この遺構とはほぼ同時期と考えられる井戸跡。



第1図 遺跡位置図

※ 〇 は古代の遺跡

*秋田県立博物館

〈主な出土遺物〉 須恵器（杯・蓋・壺・甕）、土師器（杯・高杯・甕）、木器（田下駄・曲物・椀皿のくり物など）、木簡（鎌倉～室町時代）、須恵器杯は125点、須恵器蓋が2点報告されていて、そのうち杯46点、蓋1点が墨書土器である。これらの土器類の大部分は地表から1～1.5m前後下の家屋遺材直下の北東部に密集して出土している。

第2次調査

〈期間〉 昭和40年8月

〈主な検出遺構〉 小谷地第2地区より桁行8.4m以上あると考えられる家屋遺構。同第3地区より溝跡。飯森第1地区より中世と考えられる井戸跡。

〈主な出土遺物〉 小谷地第2・3地区より弥生式土器、須恵器（杯・蓋）、土師器甕、土錘、木器（曲物・斎串など）、鉄器。飯森第1地区より木器（刀子・木製馬・杓・漆器など）が出土している。須恵器は杯が4点、蓋が1点報告されていて、そのうち杯2点・蓋1点に墨書がある。なお第2地区からは家屋遺材が発見されたが、内部まで発掘しなかったため遺物は少ない。

第3次調査

〈期間〉 昭和41年8月

〈主な検出遺構〉 第2次調査で発見された家屋の南側部分を追求したもので、家屋の全体像は明らかにできなかったものの、堅穴の東西径がおよそ10m前後であることが確認された。

〈主な出土遺物〉 弥生式土器、須恵器（杯・蓋・壺・甕）、土師器（杯・高杯・壺・甕）、木器（皿・椀・鉢・曲物・下駄など）、鉄器（小刀・鎌・釘）、砥石、土錘。須恵器は杯が282点、蓋が9点報告されていて、そのうち杯106点、蓋1点に墨書がある。墨書土器の大部分は家屋遺構から離れた南東部でまとまって出土した。地表から1～1.5m前後下になる。

第4次調査

〈期間〉 昭和56年10月

〈主な検出遺構〉 長軸6.5m以上、短軸4m強とする堅穴に伴う家屋遺構。この遺構は伴出土器より5世紀のものと考えられている。

〈主な出土遺物〉 家屋遺構の堅穴床面から弥生式土器、5世紀の土師器が出土。屋根板材の30cm上から須恵器数点出土。墨書土器は検出されなかった。

Ⅲ 墨書土器の分類

図示した墨書のある土器について、ここでは、■土器自体の特徴を明らかにして分類すること、■墨書きされた文字と記号の特色を明らかにすること、■土器と墨書の関係について、以上の三点について順を追って述べる。 ※文中の〔 〕は実測図番号である。

■土器の分類

墨書のある土器の器形は、二点の蓋〔11・77〕を除いて杯だけである。その杯は、成形技法・調整技法・焼成方法のちがいによって土師器・須恵器・赤焼土器¹⁾・灰釉陶器の四種類に分けられる²⁾。ただし数の上では、須恵器、赤焼土器が大多数を占め、土師器と灰釉陶器は各1点ずつである。

種類で分けるとともに須恵器・赤焼土器は、底部の切り離し手法・高台の有無・形態から分類をした。

《Ⅰ：土師器》〔26〕

平底で、体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾し、口縁端で外反している。底部は回転糸切りで切り離されており、切り離した後、外面の底辺部から体部中位にかけては、回転ヘラ削り調整が、体部中位から口縁部にかけては、横方向のヘラミガキ調整が施されている。なお内面は、ヘラミガキ調整の後に黒色処理されている。ヘラミガキ調整は丁寧で、底面では不定方向、体部では横方向に施されている。

《Ⅱ：須恵器》

ロクロ成形された後の底部の切り離し手法、高台の有無・形態から分類した。

〈a〉底部が回転ヘラ切りで切り離されている。

高台の無いものをⅡ a 1・Ⅱ a 2に、高台の有るものをⅡ a ①・Ⅱ a ②に分類した。

▷Ⅱ a 1〔2・27～30・80・84・95～97〕

器高が低く、底部の比較的大きいものである。底部と体部とのさかいは丸味をもっており〔2・97〕のように丸底気味のものもある。なお色調は灰色を呈するものが多い。

▷Ⅱ a 2〔1・10・31～49・65～67・82・83〕

Ⅱ a 1に比べて器高が高く、底部は小さい。底部は平坦で、体部とのさかいは判然としている。なお色調は灰黒色を呈するものが多い。

▷Ⅱ a ①〔3〕

小さな鉢状のものに低い高台がついている。比較的

大形のもので、内外面ともにロクロ目の凹凸がはっきりしており、体部下位には回転ヘラケズリ調整が施されている。なお高台は、切り離し後に付けたもので底辺部より8mm程内側に付いている。

▷Ⅱ a ② [100]

Ⅱ a ①よりも一回り小さい。底部内側にロクロ目の凹凸がみられるが、他は平滑に成形され、調整もない。高台は切り離し後に付けたもので、底辺部にそって幅広のものを付けている。

〈b〉静止糸切りで底部が切り離されている。

平底で高台の無いものが2点だけであるが、形態にちがいがみられる。

▷Ⅱ b 1 [51]

器高が低く、体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾している。

▷Ⅱ b 2 [99]

器高が比較的高く、体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。

〈c〉底部が回転糸切りで切り離されている。

高台の無いものをⅡ c 1・Ⅱ c 2・Ⅱ c 3に、高台の有るものをⅡ c ①・Ⅱ c ②・Ⅱ c ③に分類した。

▷Ⅱ c 1 [69・73・78・79・85・86]

器高が低く、底部も小さい。体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾している。底部と体部のさかいが判然としている。

▷Ⅱ c 2 [4・5・87・88]

器高が比較的高く、底部が小さい。体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。

▷Ⅱ c 3 [6・52]

器高が低く、底部が比較的大きい。体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾している。底部と体部のさかいは丸くなっている。

▷Ⅱ c ① [7・8]

Ⅱ c 2と形は似ているが、底辺部をロクロで挽き出して、幅のせまく低い高台を付けている。

▷Ⅱ c ② [9・76]

小さい鉢状のものに、幅がせまく低い高台が付いている。高台はⅡ c ①と同様に、底辺部をロクロで挽き出したものである。

▷Ⅱ c ③ [75・81・92・93]

皿状のものに、高さや厚みのある高台を付けている。

高台は、底辺部より外に張り出しており、環状の粘土を付けた後に、まわりをナデ調整している。

なお、高台の有るものは、いずれも焼きしまりがよい。

《Ⅲ：赤焼土器》

底部の切り離しは、回転糸切り〈c〉であるが、高台の有無・形態により4類に分けた。高台の無いものをⅢ c 1・Ⅲ c 2・Ⅲ c 3に、高台の有るものをⅢ c ①とした。

▷Ⅲ c 1 [12~17・54・103~109・111]

器高が高く、底部が小さい。体部から口縁部にかけては直線的に外傾している。内外面ともにロクロ目の凹凸がはっきりしている。なお器壁がうすく、色調は橙色を呈するものが多い。

▷Ⅲ c 2 [56~61]

大形のものが多い。底部の切り離しは回転糸切りであるが、底面の中央が凹み、底辺部に糸のあたりが残ったままである。体部から口縁部にかけては直線的に外傾している。なお全体に厚手のつくりであるが、とくに底辺部が厚い。色調は灰褐色を呈している。

▷Ⅲ c 3 [62・63・113・114]

器高が低く、皿状をしている。体部より口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端がわずかに外反している。Ⅲ c 2と同じように厚手のつくりであり、色調は淡橙色ないし、黄橙色を呈している。[63・114]では底部中央が凹み、底辺部に糸のあたりを残している。

▷Ⅲ c ① [64]

Ⅲ c 3と同様に皿状をしているが、底辺部をロクロで挽き出した低い高台を付けている。

厚手のⅢ c 2・Ⅲ c 3・Ⅲ c ①は、いずれも内外面ともにロクロ目の凹凸がほとんどみられず、とくに内面が平滑に仕上げられている。

《Ⅳ：灰釉陶器》 [115]

体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾し、口縁端でわずかに外反している。底辺部にそって付けた高台は、断面が三角形になるように挽いている。灰釉は、内側だけにかかっている。

■墨書された文字と記号の特色

115点の土器に墨書された文字・記号は、以下のような特徴をもっている。

1. 「主」等の文字が書かれたものが27種類、「○」等の記号が書かれたものが3種類である。

2. 文字・記号が全体で30種類と多いのかかわらず、第1次調査地区と第3次調査地区出土の墨書を対比すると、共通する文字・記号は少なく「主」「大」「高」「○」だけである。「雄」は第3次調査地区から全点数出土している。

3. 土器1点につき1文字あるいは1記号を書いたものが多く、2文字を書いたものは6点と少ない。一文字の中で「主」「雄」が、全体のほぼ50%を占めている。1文字・1記号の中で他に2点以上出土しているのは、「大」「上」「田」「高」「○」「十」だけで、あとは1点だけの出土例が多い。

4. 文字・記号は、いずれも土器の外面に書かれている³⁾。

5. 杯に書かれた文字・記号の位置は、底部が多く体部は少ない。体部に書かれた文字は、口縁部を上にしてみた場合に正立するものと倒立するものがあり、数としてはほぼ半々である。なお横になるもの、斜めになるものが各1点ずつある。

6. 底部に書かれた文字のうち、文字を大きく底面いっぱい書き込んだものと、片側によせて小さく書き込んだものがみられる。出土点数がとくに多い「主」は、文字を正立の状態で見ると、左寄りが多く、右寄りは2点だけである。

7. 文字の位置・文字の大きさとともに、筆使いが似ているものが7組みられる。

※「主」では

[29][30]=文字は比較的大きく、位置が上方やや左寄りである。一番下の横画を極端に長く引いている。

[31][32][33][34]=文字は小さく、位置が中央左側に寄っている。一画ごとのおさえがきいている。

[35][36]=文字は比較的小さく、位置が中央左側に寄っている。縦画が太く、一番下の横画の最後を左にはねている。

[52][53]=文字は大きく、位置がほぼ中央である。点が小さく、柔軟な筆使いをしている。

[56][57]=文字はかなり小さく、位置が中央左側に寄っている。一画ごとのおさえがしっかりしている。

※「雄」では

[72][73]=文字は比較的小さく、位置が[72]でやや左上、[73]ではほぼ中央にある。細い筆使いで「隹」の縦画を極端に長くしている。

※「上」では

[78][79]=文字は比較的小さく、位置が[78]で上方中央、[79]で上方のやや左寄りにある。下の横画をやや長く書いている。

8. 文字は楷書体が多く、草書体は3点だけである。

■土器と墨書の関連について

1. 「主」が書かれた杯で、文字の位置が体部にあるのは1点の土器器だけで、須恵器・赤焼土器では底部にある。「主」が書かれた須恵器の杯は、底部が回転糸切りで切り離されたものが少なく、回転ヘラ切りで切り離されたⅡa 2に分類されるものが多い。赤焼土器では、Ⅲc 2・3に分類されるものが大部分である。

2. 「雄」は須恵器にだけ書かれており、底部が回転ヘラ切りで切り離されたものと、回転糸切りで切り離されたものがある。

3. 「○」記号は、Ⅱa 1に分類した須恵器杯に多くみられる。

4. Ⅲc 1とした赤焼土器の杯では、文字あるいは記号を体部に書いたものが多い。

5. 先に「主」・「雄」・「上」が書かれたもので文字の大きさ、文字の位置・筆使いがよく似ている7組をまとめてみたが、その各組の中で、土器のつくりもきわめて類似した特徴をもっているものがある。

※「主」では

[29][30]=Ⅱa 1に分類される。色調は灰色を呈している。

[31][32][33][34]=Ⅱa 2に分類される。体部下位にふくらみをもっている。色調は灰黒色を呈し、焼きしまりがよい。

[56][57]=Ⅲc 2に分類される。かなり厚手のつくりで胎土に砂粒が混在し、ザラザラしているが、内面は滑らかな仕上げをしている。色調は灰褐色である。

※「上」では

[78][79]=Ⅱc 1に分類される。色調は灰色を呈している。

6. [116~118]に図示したものは、高台をもつ杯と、杯の高台部である。いずれも杯の内面および高台の中に墨痕が残っている。[118]では、内面が平滑で光沢を放っていることから転用硯として、他の高台は墨だめに使用されたと考えられる。

Ⅳ ま と め

秋田県内の墨書土器の出土例と対比しながら、小谷地遺跡の墨書土器について考えてみたい。

県内において、墨書土器の出土点数が多い遺跡として、秋田市の秋田城跡、仙北町・千畑町の払田柵跡、大曲市の藤木遺跡、怨遺跡、西目町の客殿森遺跡、羽後町の城神廻り遺跡がある。各遺跡出土の墨書のある土器は、杯が大部分であり、底部の切り離しが回転ヘラ切り・回転糸切りの須恵器杯と、回転糸切りの赤焼土器杯が共伴している⁴⁾。小谷地遺跡でも同様に須恵器杯・赤焼土器杯が共伴しているが、須恵器杯ではⅡC①・ⅡC②・ⅡC③とした三種類の高台をもつタイプがあること、赤焼土器も4タイプに分けられること、灰釉陶器が加わっていることなど、他の遺跡と比べて種類が多くある。

墨書された文字・記号をみると、第3図に示したように小谷地遺跡と共通した文字・記号をもつ遺跡がある。また小谷地遺跡で多数出土している「主」と「雄」に対応するように、その遺跡で多数を占める文字もっている遺跡がある。藤木遺跡では「伴」であり、怨遺跡では「凡」と「福」である。藤木遺跡・怨遺跡ともかなり密集した状態で墨書土器が出土しており、出土状況も小谷地遺跡と似かよっている⁵⁾。

なお小谷地遺跡出土の墨書土器の年代については、器種・切り離し手法・形態にそれぞれちがいがみられるが、9世紀中葉から9世紀後半にかけての年代⁶⁾が考えられる。

本稿では土器の分類・墨書の特徴から情報をできるだけ引き出したつもりであるが、小谷地遺跡における墨書土器の意義については考究することができなかった。さらに出土状況・遺構との関連、周辺遺跡との関係について調査を進めていった上で、検討しなければならないと考える。

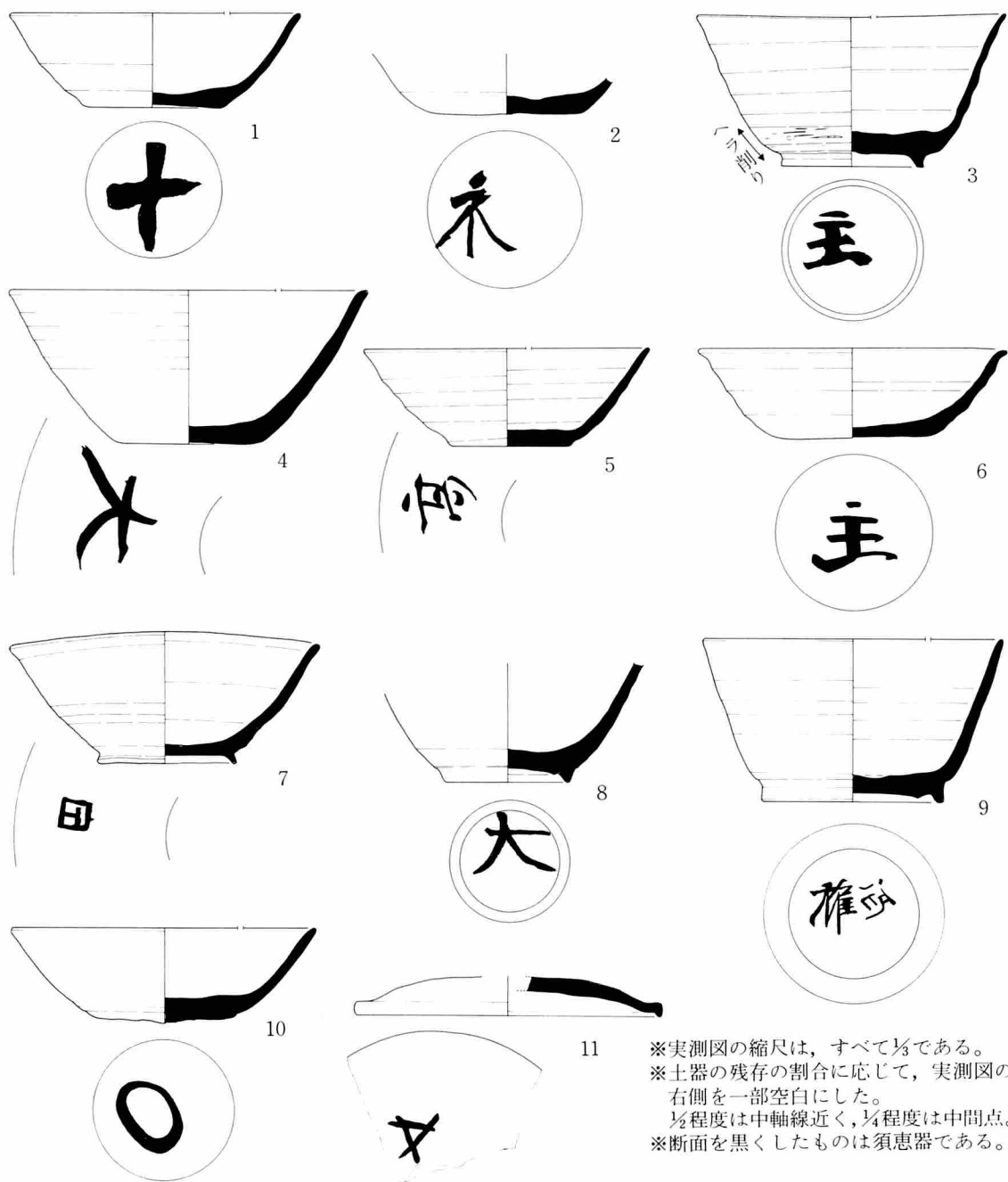
最後になりましたが文字の判読全般については、国立歴史民俗博物館の平川南氏より、文字の筆使いについては当館の渡部綱次郎氏より御教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) ここで赤焼土器の杯としたのは、色調が橙色・明褐色・黄褐色を呈し、成形に際しロクロを使用し底部切り離しが回転糸切り手法によるもので、内面のヘラミガキと黒色処理を行わないものである。第1次～第3次調査報告書では須恵器に分類しているものが多い。
- 2) 出土遺物の中で墨書土器の分類にない杯としては、ⅢC①の赤焼土器と形態・色調が類似するが、黒色処理されている土師器杯がある。
- 3) 図示しなかったものの中に、須恵器蓋の内側に「○カ？」の墨書のあるものが1点ある。
- 4) 小谷地遺跡では、第1次調査地区の10㎡から約50点、第3次調査地区の30㎡から約100点の出土があった。
- 5) 払田柵跡第七次発掘調査検出のSK60土壌内から嘉祥二年(849)の年紀をもつ木筒にともなって、底部の切り離しが回転糸切りで体部にヘラケズリ調整のある明褐色を呈する杯、同じく底部の切り離しが、回転ヘラ切り・回転糸切りの須恵器杯が出土していることから年代を推定した。また、須恵器杯については、小谷地遺跡から6km程北に行ったところに位置する若美町海老沢窯跡3号窯で、本稿で分類したⅡa1・Ⅱa2・Ⅱc2・Ⅱc3・Ⅱc①・Ⅱc③の共伴関係が認められる。
- 4) 赤焼土器杯については、秋田城跡の報告では赤褐色土器杯と、払田柵跡・藤木遺跡では、土師器杯と分類している。

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会(1965)『秋田県文化財調査報告書第5集一脇本埋没家屋第一次調査概報』
- 秋田県教育委員会(1966)『秋田県文化財調査報告書第6集一脇本埋没家屋第二次調査概報』
- 秋田県教育委員会(1967)『秋田県文化財調査報告書第11集一脇本埋没家屋第三次調査概報』
- 男鹿市教育委員会(1982)『男鹿市文化財調査報告書第2集一脇本埋没家屋第四次調査報告書』
- 高橋学(1986)「秋田県内出土の墨書土器集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第1号』
- 秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所(1984)『秋田城跡発掘調査事務所研究紀要Ⅰ一秋田城出土文字資料集』
- 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所(1985)『秋田県文化財報告書第122集一払田柵跡Ⅰ』
- 秋田県教育委員会(1981)『秋田県文化財調査報告書第81集一藤木遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会(1975)『秋田県文化財報告書第32集一海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』

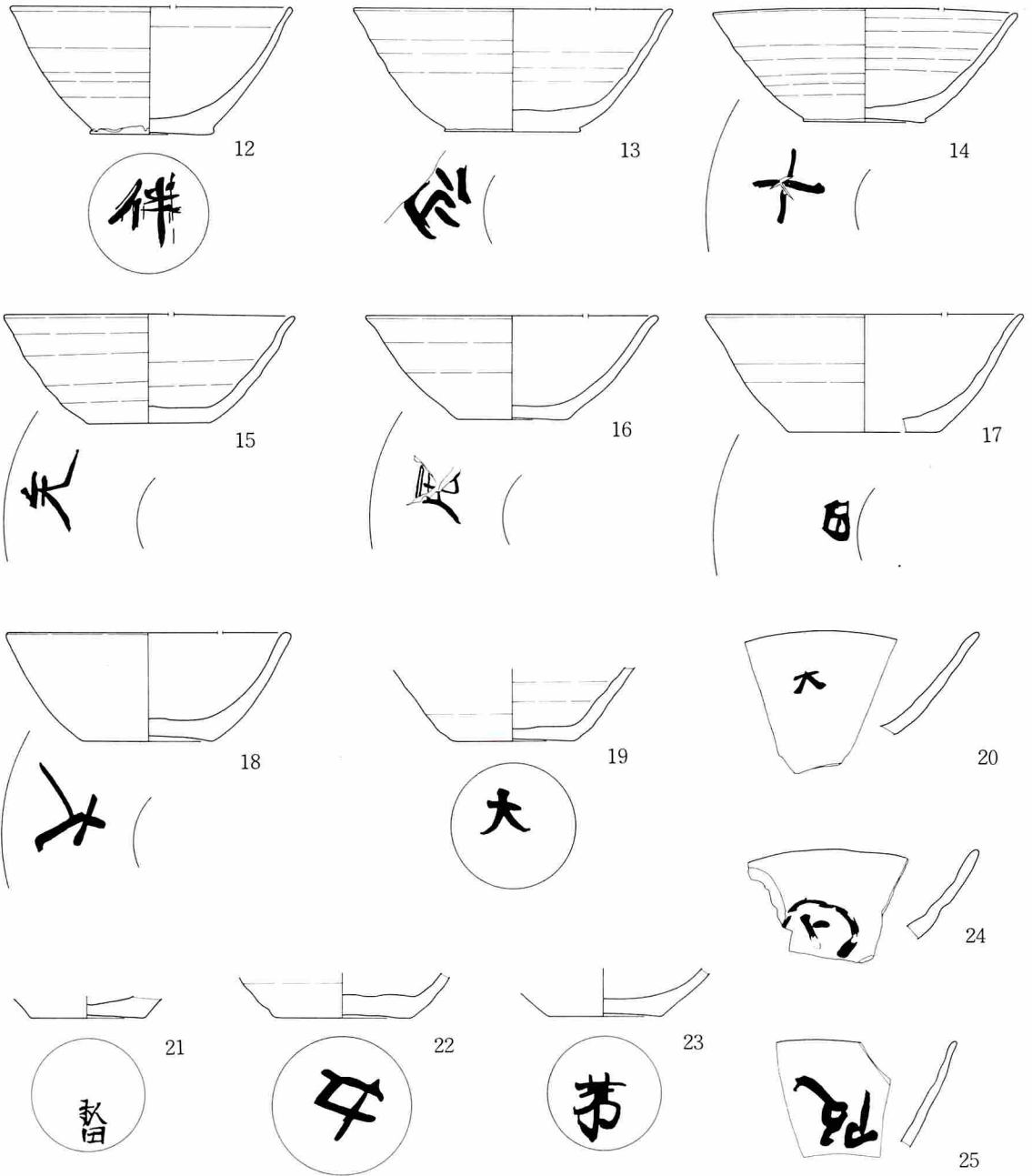


※実測図の縮尺は、すべて $\frac{1}{2}$ である。
 ※土器の残存の割合に応じて、実測図の右側を一部空白にした。
 $\frac{1}{2}$ 程度は中軸線近く、 $\frac{1}{4}$ 程度は中間点。
 ※断面を黒くしたものは須恵器である。

番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
1	須恵器 杯	(13.1)	6.1	4.3	灰白・灰白	回へラ	十		7	須恵器高台付杯	14.0	6.3	5.9	灰・灰	回系	田	
2	須恵器 杯	—	7.0	—	灰・灰	回へラ	ネ		8	須恵器高台付杯	—	5.5	—	灰・灰	回系	大	
3	須恵器高台付杯	13.8	6.4	6.8	灰・灰	へラ	主		9	須恵器高台付杯	13.4	8.1	7.3	にぶい黄橙・にぶい黄橙	回系	雄酒	
4	須恵器 杯	16.2	6.4	6.9	灰黄褐・にぶい黄橙	回系	大		10	須恵器 杯	(13.8)	6.4	4.4	灰白・灰白	回へラ	○	
5	須恵器 杯	13.0	5.4	4.4	黄灰・黄灰	回系	高	底部外墨痕	11	須恵器 蓋	(14.0)	—	—	黒・灰白	—	—	♀カ 転用碗
6	須恵器 杯	13.8	7.1	4.1	にぶい赤褐・褐	回系	主										※□は判読不明

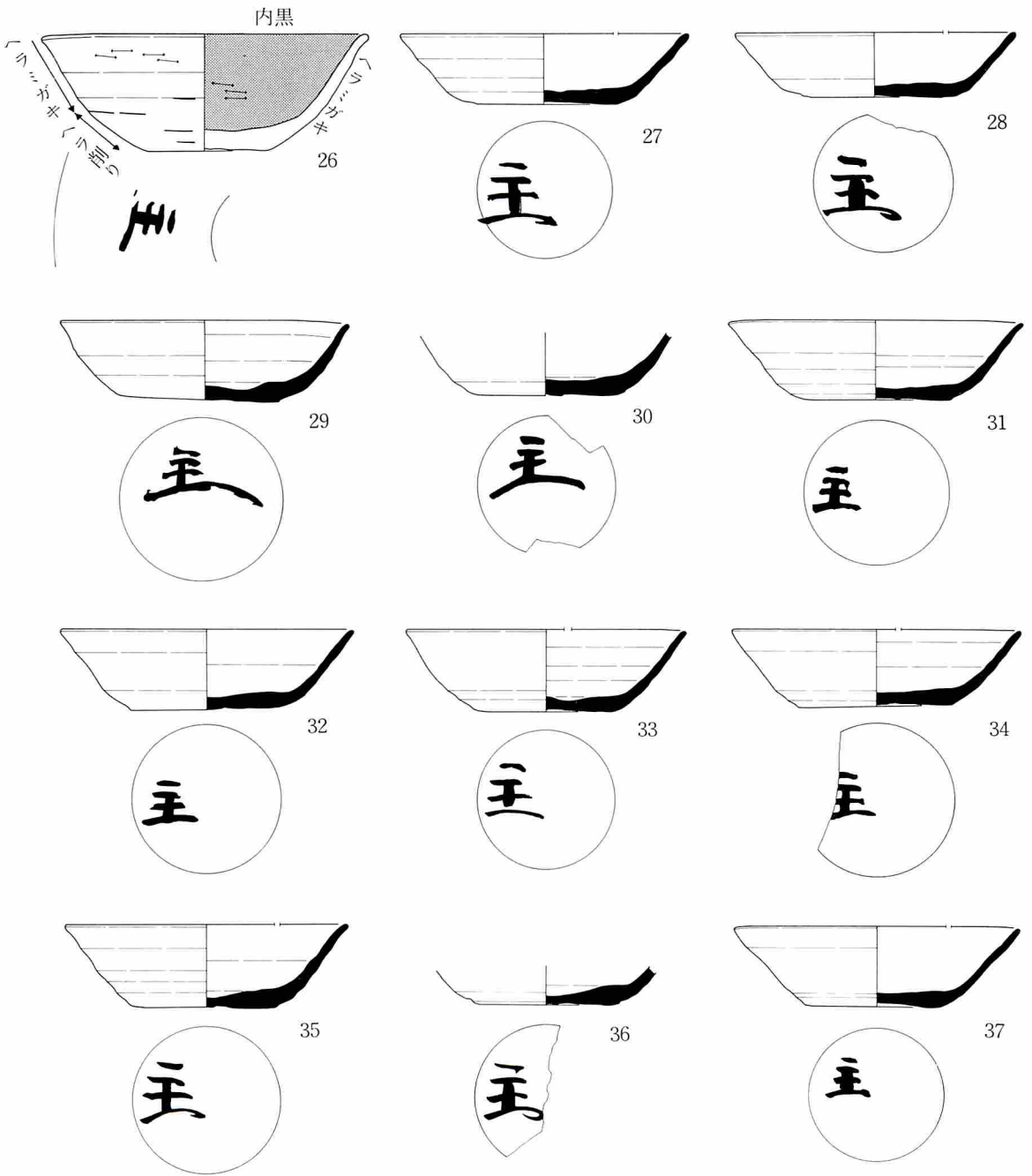
第2-1図 〈第1次調査区出土〉

男鹿市小谷地遺跡の墨書土器



番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切刃	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切刃	墨書銘	備考
12	赤焼土器 杯	12.4	5.4	5.6	にぶい黄橙・にぶい黄褐	回糸	伴		19	赤焼土器 杯	—	5.5	—	オリーブ褐・黄褐	回糸	大	
13	赤焼土器 杯	14.2	6.0	5.4	にぶい黄褐・にぶい橙	静糸	仙		20	赤焼土器 杯	—	—	—	にぶい橙・にぶい橙	—	大	
14	赤焼土器 杯	13.4	5.4	5.0	にぶい赤褐・にぶい赤褐	回糸	十		21	赤焼土器 杯	—	5.0	—	灰白・灰白	回糸	秋田	
15	赤焼土器 杯	12.8	4.8	5.4	にぶい橙・にぶい赤褐	回糸	矢		22	赤焼土器 杯	—	6.1	—	灰黄・灰黄	回糸	□女カ	
16	赤焼土器 杯	13.0	4.8	4.5	にぶい橙・にぶい赤褐	回糸	□		23	赤焼土器 杯	—	5.0	—	にぶい橙・にぶい黄橙	回糸	茅	
17	赤焼土器 杯	14.0	6.6	5.2	にぶい黄褐・浅黄	回糸	田		24	赤焼土器 杯	—	—	—	灰黄・灰黄	—	①	
18	赤焼土器 杯	12.5	5.7	5.7	灰黄・灰黄	静糸	大		25	赤焼土器 杯	—	—	—	にぶい黄橙・にぶい黄橙	—	□阪カ	

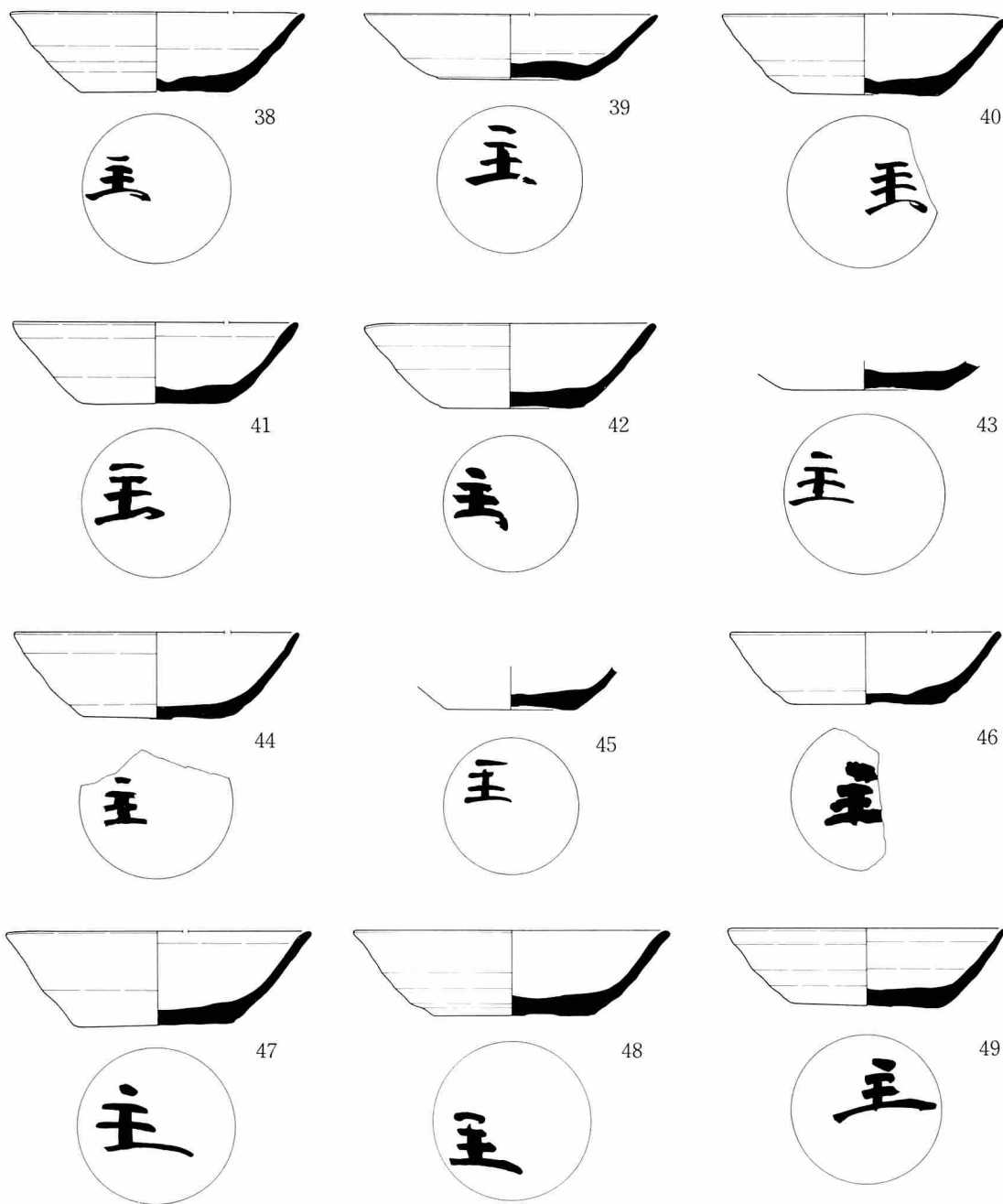
第2—2図 〈第1次調査区出土〉



番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
26	土師器 杯	14.7	5.5	5.3	黒・浅黄	回系	主	内黒	32	須恵器 杯	13.3	6.7	3.7	灰黄褐・灰	回ヘラ	主	
27	須恵器 杯	13.3	6.3	3.2	灰黄褐・灰黄	回ヘラ	主		33	須恵器 杯	12.9	6.3	3.8	灰・灰	回ヘラ	主	
28	須恵器 杯	(12.6)	6.3	3.0	暗灰黄・灰黄	回ヘラ	主		34	須恵器 杯	13.0	7.0	3.6	暗灰黄・黄灰	回ヘラ	主	
29	須恵器 杯	13.2	7.4	3.7	暗灰黄・暗灰黄	回ヘラ	主		35	須恵器 杯	12.9	6.6	3.8	灰・灰	回ヘラ	主	
30	須恵器 杯	—	6.2	—	暗灰黄・灰	回ヘラ	主		36	須恵器 杯	—	6.6	—	灰黄褐・灰黄	回ヘラ	主	
31	須恵器 杯	13.3	6.6	3.6	灰・灰	回ヘラ	主		37	須恵器 杯	12.9	6.2	4.7	灰・灰	回ヘラ	主	

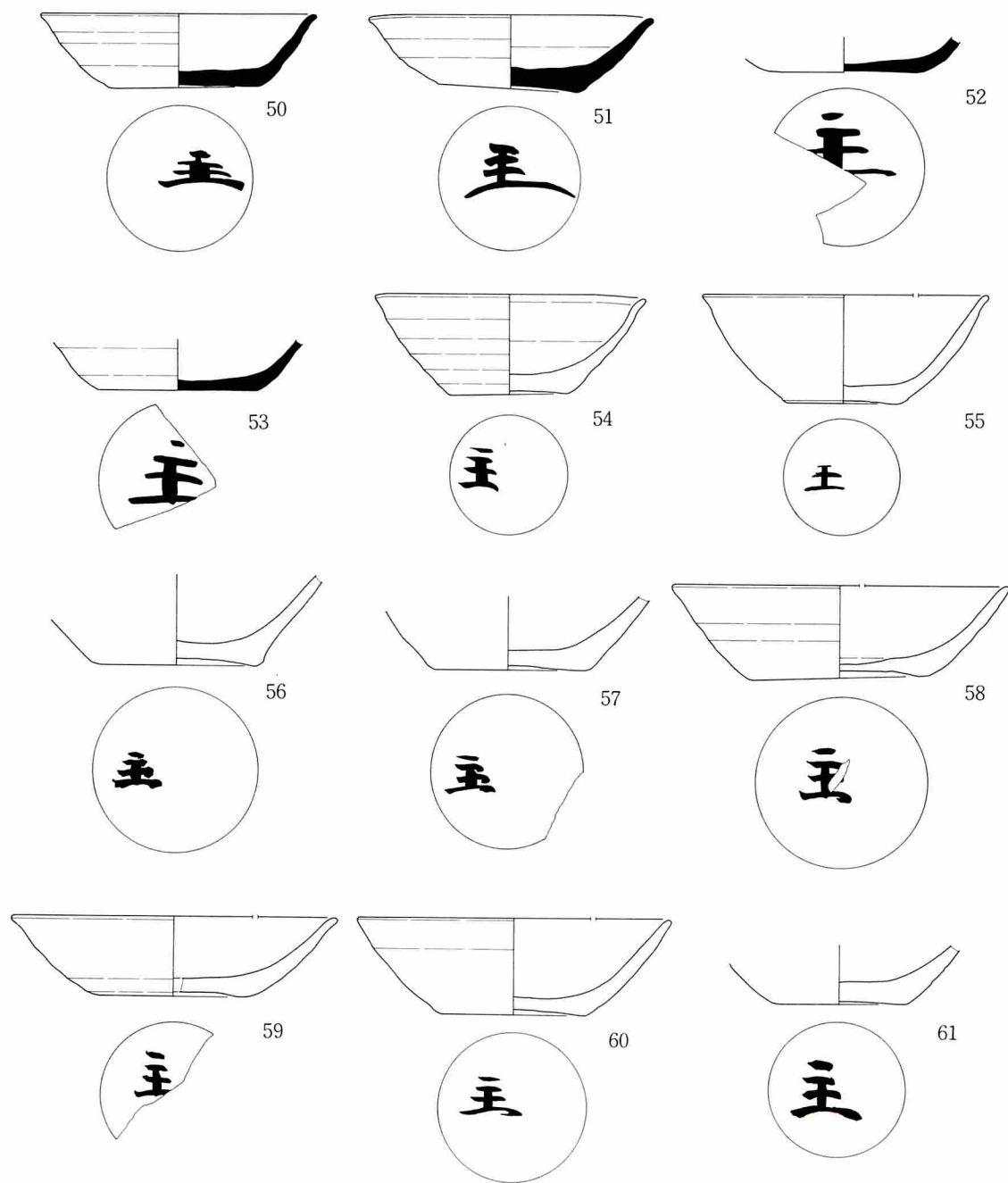
第2—3図 (第3次調査区出土)

男鹿市小谷地遺跡の墨書土器



番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
38	須恵器 杯	12.9	6.5	3.6	暗灰黄・灰黄	回へラ	主		44	須恵器 杯	(12.5)	(6.7)	3.9	黄灰・灰	回へラ	主	
39	須恵器 杯	13.0	6.4	2.9	灰・灰	回へラ	主		45	須恵器 杯	—	6.0	—	灰黄褐・灰黄	回へラ	主	
40	須恵器 杯	12.4	6.6	4.6	灰黄褐・灰黄	回へラ	主		46	須恵器 杯	(11.8)	(6.6)	3.2	灰黄褐・黄灰	回へラ	主	
41	須恵器 杯	12.4	6.5	3.6	灰黄褐・暗灰黄	回へラ	主		47	須恵器 杯	13.4	6.9	4.2	にぶい褐・にぶい黄橙	回へラ	主	
42	須恵器 杯	12.9	6.0	3.7	にぶい黄褐・浅黄	回へラ	主		48	須恵器 杯	14.0	7.0	3.8	にぶい黄橙・浅黄	回へラ	主	
43	須恵器 杯	—	7.1	—	灰黄褐・灰黄	回へラ	主		49	須恵器 杯	12.1	6.6	4.5	暗灰黄・灰黄	回へラ	主	外煤付着

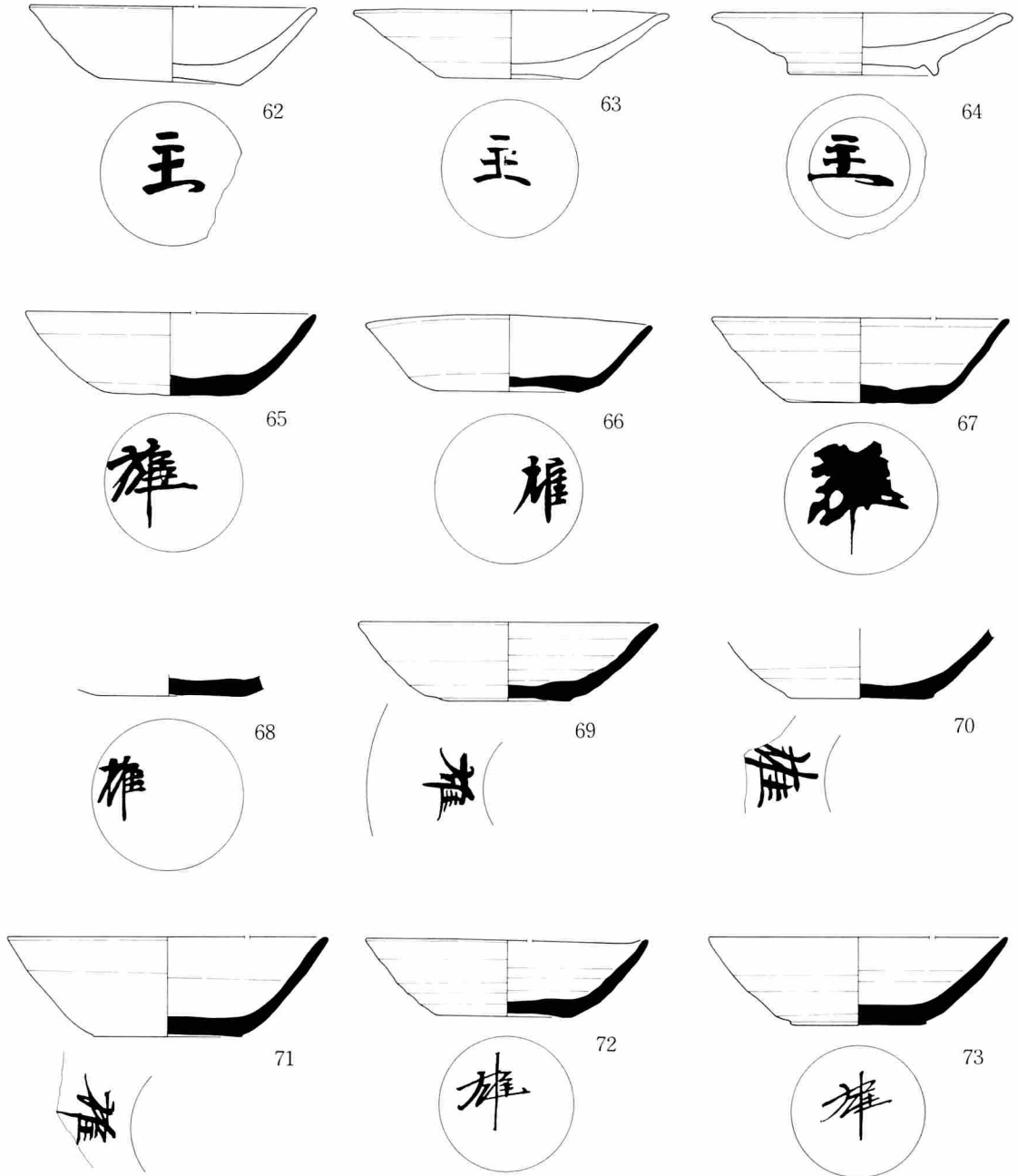
第2-4図 (第3次調査区出土)



番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
50	須恵器 杯	12.4	6.5	3.4	灰黄褐・灰黄褐	回糸	主		56	赤烧土器 杯	—	7.4	—	灰黄褐・浅黄	回糸	主	
51	須恵器 杯	13.0	6.5	3.5	にぶい黄・にぶい黄	静糸	主		57	赤烧土器 杯	—	(6.9)	—	灰黄褐・にぶい黄橙	回糸	主	
52	須恵器 杯	—	(7.1)	—	灰褐・灰黄褐	回糸	主		58	赤烧土器 杯	15.0	7.7	4.3	灰褐・にぶい黄橙	回糸	主	
53	須恵器 杯	—	(7.2)	—	にぶい橙・にぶい橙	回糸	主		59	赤烧土器 杯	(14.7)	(6.6)	3.5	灰褐・にぶい褐	回糸	主	内墨痕
54	赤烧土器 杯	12.4	5.4	4.6	にぶい黄褐・にぶい黄褐	回糸	主		60	赤烧土器 杯	14.3	6.7	4.4	灰黄褐・灰黄褐	回糸	主	
55	赤烧土器 杯	(12.8)	5.2	4.9	にぶい橙・にぶい黄橙	回糸	主	内漆付着	61	赤烧土器 杯	—	6.1	—	淡黄・淡黄	回糸	主	

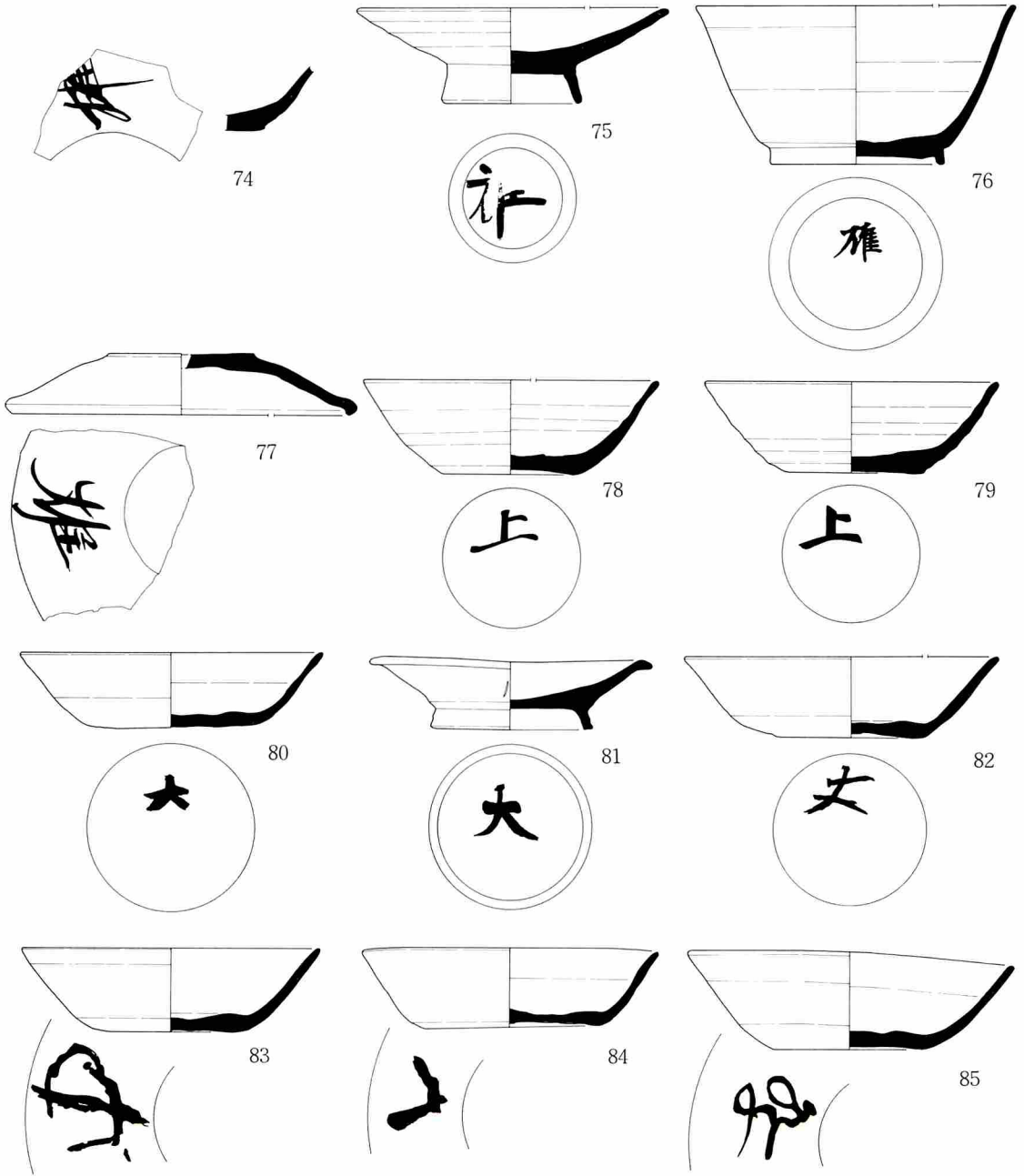
第2-5図 (第3次調査区出土)

男鹿市小谷地遺跡の墨書土器



番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
62	赤焼土器 杯	12.7	6.3	3.5	にぶい褐・にぶい橙	回糸	主		68	須恵器 杯	—	6.8	—	暗灰黄・灰	回ヘラ	雄	
63	赤焼土器 杯	14.1	6.1	3.0	灰黄褐・にぶい黄橙	回糸	主		69	須恵器 杯	13.4	5.8	3.5	黄灰・黄灰	回糸	雄	
64	赤焼土器高台付杯	13.2	6.4	2.8	淡黄・淡黄	回糸	主	内墨痕	70	須恵器 杯	—	6.4	—	黒褐・黄灰	回糸	雄	
65	須恵器 杯	12.8	6.0	3.6	暗灰黄・灰	回ヘラ	雄		71	須恵器 杯	14.2	6.6	4.4	灰黄・灰黄	回糸	雄	
66	須恵器 杯	12.8	6.5	3.4	灰・灰	回ヘラ	雄		72	須恵器 杯	12.6	5.8	3.4	灰黄・灰	回糸	雄	
67	須恵器 杯	(13.0)	6.8	3.8	灰・灰	回ヘラ	雄		73	須恵器 杯	13.0	5.9	3.9	灰黄褐・にぶい黄橙	回糸	雄	

第2—6図 (第3次調査区出土)



番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
74	須恵器 杯	—	—	—	暗灰黄・灰	回糸	雄		80	須恵器 杯	13.4	7.4	3.4	黄灰・灰	回ヘラ	大	
75	須恵器高台付杯	(13.9)	6.3	4.2	灰・灰	不明	雄		81	須恵器高台付杯	12.6	7.2	3.2	灰・灰	回糸	大	
76	須恵器高台付杯	(14.0)	7.6	7.0	暗灰黄・黄灰	回糸	雄		82	須恵器 杯	(13.8)	6.7	3.6	暗灰黄・灰黄	回ヘラ	丈	
77	須恵器 蓋	(15.5)	(6.4)	—	灰・灰	回糸	雄	内墨痕	83	須恵器 杯	(13.2)	(6.3)	3.7	灰白・灰白	回ヘラ	□	
78	須恵器 杯	13.2	6.2	4.2	灰白・灰白	回糸	上		84	須恵器 杯	13.2	8.2	3.6	灰・灰	回ヘラ	□	
79	須恵器 杯	12.9	6.0	4.1	灰黄褐・灰黄	回糸	上		85	須恵器 杯	14.3	6.6	4.4	暗灰黄・暗灰黄	回糸	□	

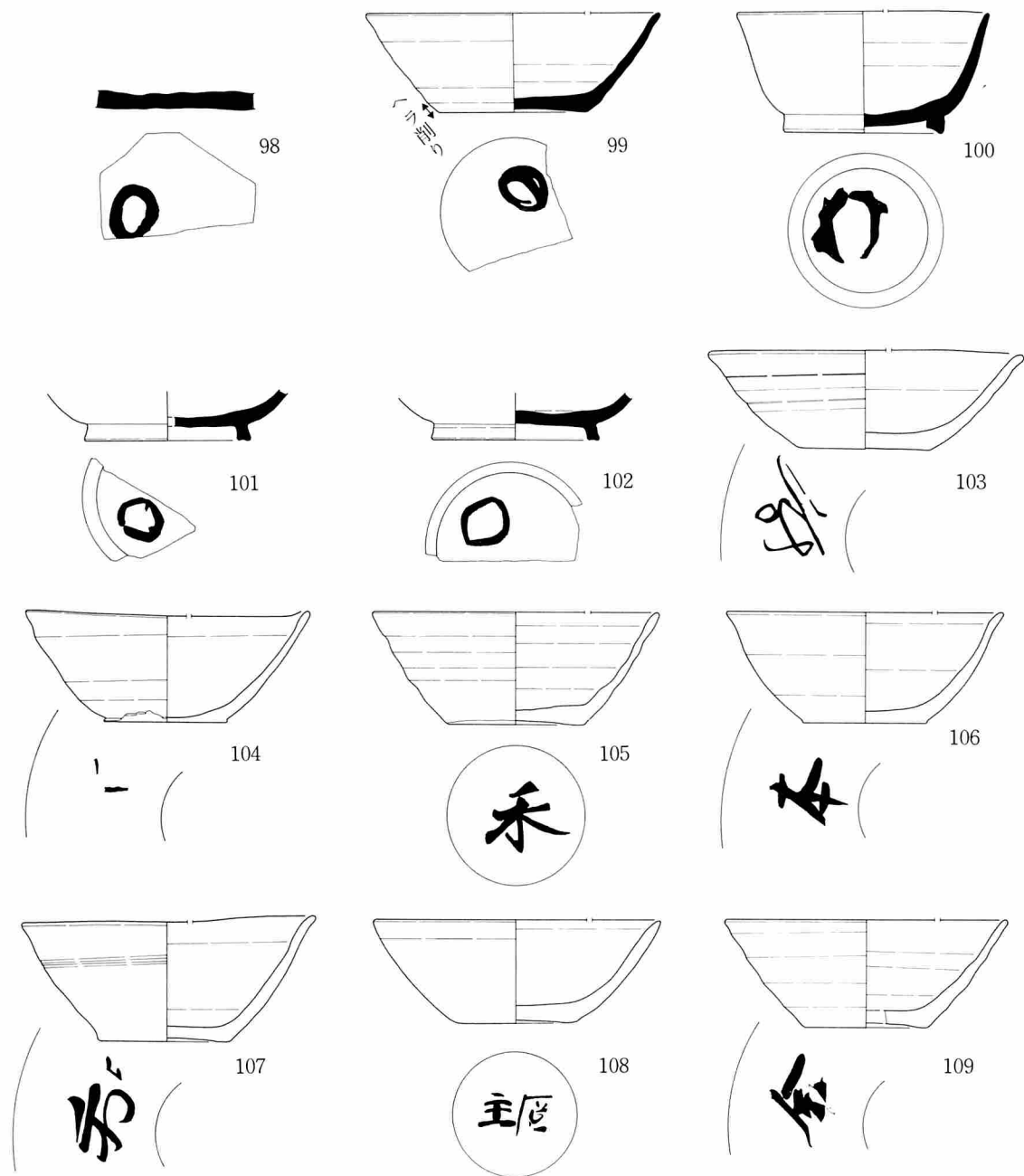
第2—7図 〈第3次調査区出土〉

男鹿市小谷地遺跡の墨書土器



番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
86	須恵器 杯	(13.4)	6.0	3.5	にぶい黄・灰黄	回糸	廣		92	須恵器高台付杯	12.8	6.5	3.6	灰・灰	不明	五	内墨痕
87	須恵器 杯	13.6	5.6	4.8	暗灰黄・暗灰黄	回糸	五	内外燻付着	93	須恵器高台付杯	—	5.9	—	灰・灰	回糸	里	
88	須恵器 杯	13.2	5.2	4.4	暗灰黄・暗灰黄	回糸	高		94	須恵器高台付杯	—	5.8	—	灰・灰	回糸	里維	
89	須恵器 杯	—	5.9	—	暗灰黄・灰黄	回糸	上人		95	須恵器 杯	(13.0)	(8.0)	3.7	灰黄・灰黄	回へラ	〇	
90	須恵器 杯	—	7.0	—	灰黄褐・暗灰黄	回糸	説		96	須恵器 杯	13.4	8.1	3.3	にぶい黄橙・灰黄	回へラ	〇	
91	須恵器 杯	—	(6.0)	—	暗灰黄・灰	回糸	慈		97	須恵器 杯	—	8.2	—	灰白・灰白	回へラ	〇	

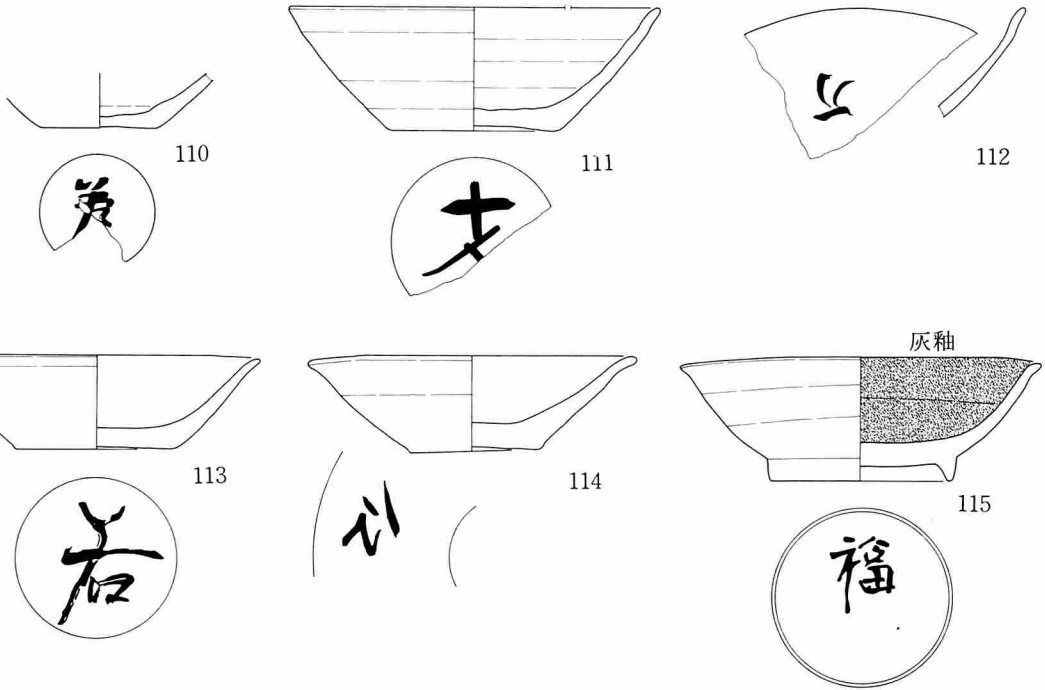
第2—8図 〈第3次調査区出土〉



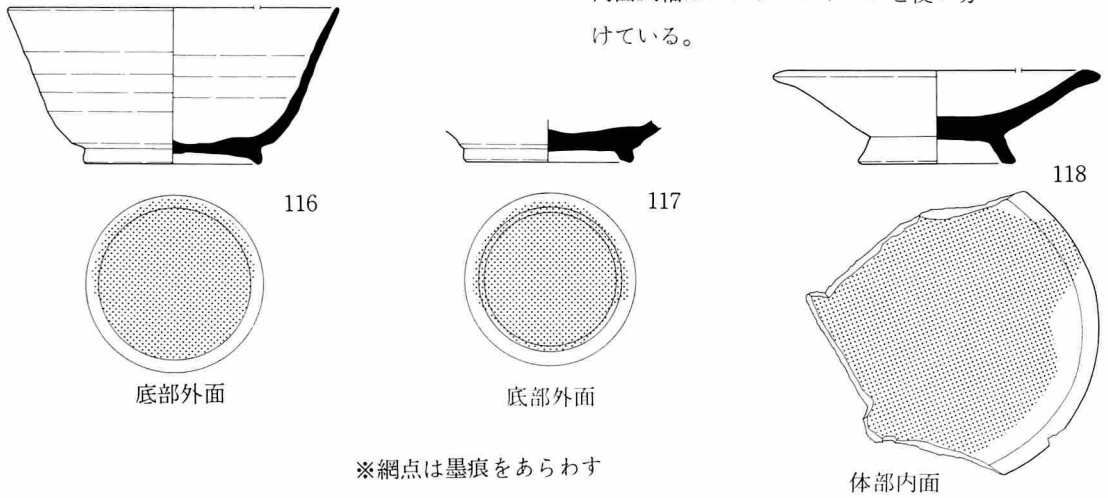
番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考
98	須恵器 杯	—	—	—	灰白・灰白	回ヘラ	○		104	赤焼土器 杯	12.6	5.4	4.9	にぶい黄橙・にぶい黄橙	回系	□本力	
99	須恵器 杯	(13.2)	(6.6)	4.4	灰黄褐・灰黄	静系	○		105	赤焼土器 杯	12.8	6.2	5.0	褐・にぶい黄橙	回系	禾	
100	須恵器高台付杯	11.1	7.1	5.4	黒褐・灰褐	不明	○		106	赤焼土器 杯	12.2	5.4	4.9	にぶい黄橙・にぶい黄橙	回系	本	
101	須恵器高台付杯	—	(7.4)	—	灰・灰	回ヘラ	○		107	赤焼土器 杯	13.0	5.8	5.3	にぶい橙・にぶい橙	回系	□本力	
102	須恵器高台付杯	—	(7.6)	—	灰・灰	回ヘラ	○		108	赤焼土器 杯	(12.8)	5.7	4.6	灰黄褐・にぶい黄橙	回系	主匠	
103	赤焼土器 杯	13.9	5.8	4.4	灰黄褐・にぶい褐	回系	□		109	赤焼土器 杯	(12.5)	(5.4)	4.8	にぶい黄橙・にぶい黄橙	回系	全	

第2—9図 〈第3次調査区出土〉

男鹿市小谷地遺跡の墨書土器



※土師器の内面黒色処理と、灰釉陶器の内面灰釉はスクリーントーンを使い分けている。

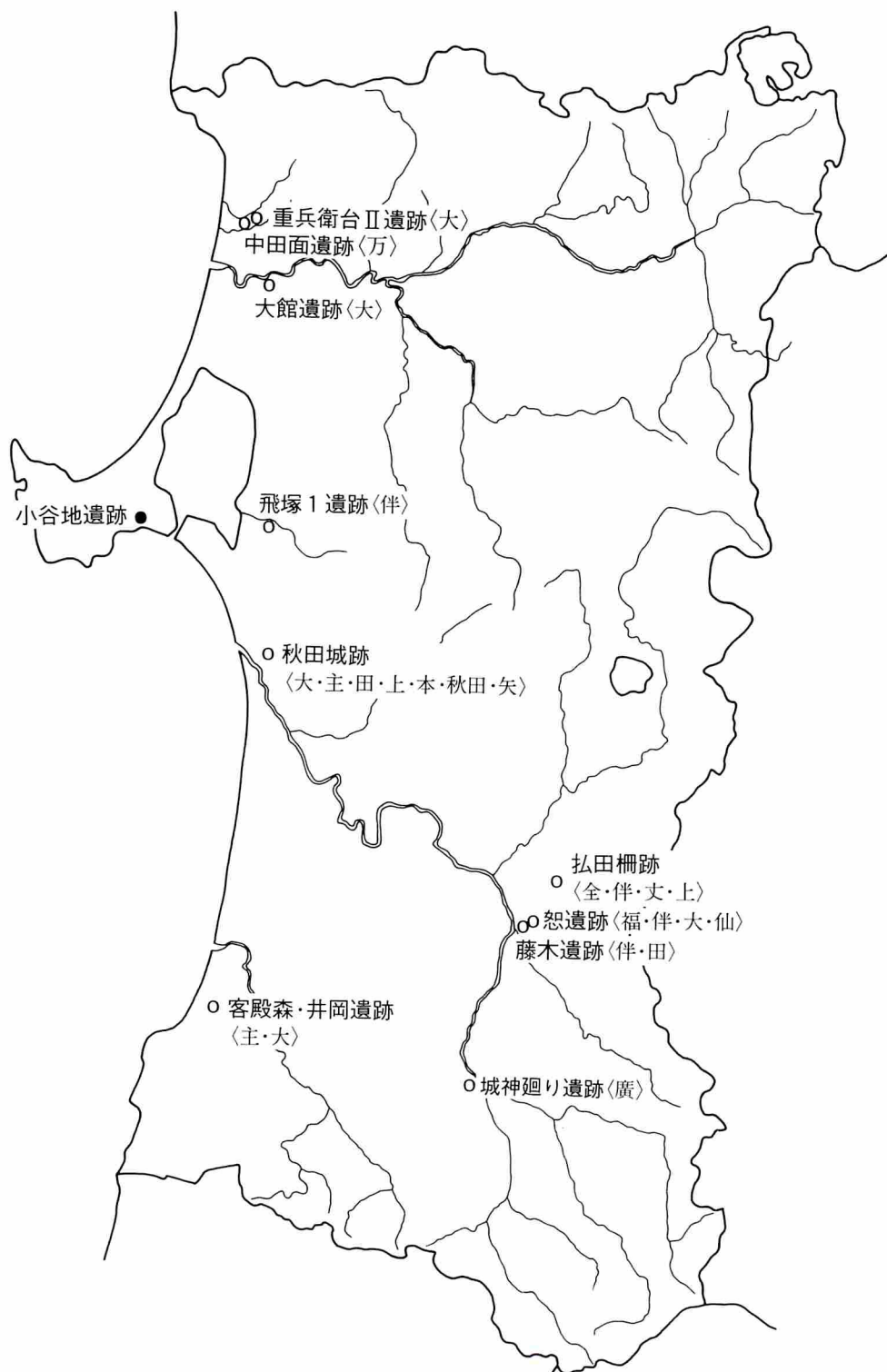


※網点は墨痕をあらわす

体部内面

番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	墨書銘	備考	番号	種類	口径	底径	器高	色調(内・外)	切り離し	備考
110	赤焼土器 杯	—	4.6	—	灰褐色・にぶい褐色	回糸	□若カ		116	須恵器高台付杯	(13.3)	7.1	6.3	灰・灰	回ヘラ	転用硯
111	赤焼土器 杯	(15.0)	(6.8)	5.0	にぶい橙・にぶい橙	回糸	□十カ		117	須恵器高台付杯	—	6.9	—	灰・灰	回ヘラ	転用硯
112	赤焼土器 杯	—	—	—	灰黄褐色・灰黄褐色	—	万		118	須恵器高台付杯	(13.0)	6.3	3.7	灰・灰	不明	転用硯
113	赤焼土器 杯	13.0	6.4	3.3	灰黄褐色・灰黄	回糸	若									
114	赤焼土器 杯	13.3	5.2	4.0	灰褐色・灰褐色	回糸	□若カ									
115	灰釉陶器高台付杯	14.4	7.2	5.0	灰オリーブ・灰	不明	福	内灰釉								

第2—10図 〈第3次調査区出土〉



第3図 共通する墨書土器を出土する遺跡